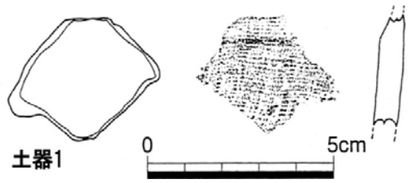
原の辻遺跡出土楽浪系滑石混入土器 新たに2点確認！

東アジア考古学研究室　古澤　義久

2011年東アジア考古学研究室では、これまで原の辻遺跡で調査された遺物のうち未報告の資料を再点検しました。その結果、外来系土器をはじめとする重要な資料が多数あることがわかりました。ここでは２点の土器片を紹介したいと思います。土器１と土器２は胎土に滑石が混ぜられ、内面には布目の痕跡がはっきりと残っています。このような土器は楽浪系土器のうち滑石混入土器といわれるものです。また、布目は型に布を被せて粘土を貼り付けて成形したときの痕跡です。



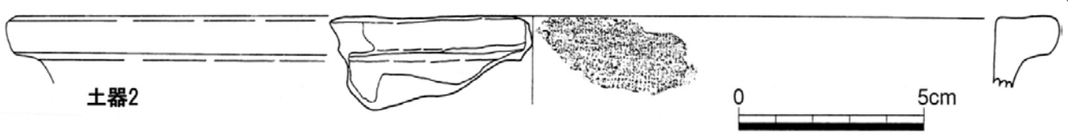
土器1外面

土器1内面

土器１は弥生時代中期中葉から後期末の土器が出土した不條地区E-17区１号土器溜から出土し、土器２は弥生時代中期から古墳時代初頭の土器が出土した不條地区コヨウ２区２号環濠から出土しました。特に土器２のような土器は植木鉢の形をしていることから花盆形土器と呼ばれています。花盆形土器の年代は古朝鮮時代から楽浪郡時代ですが（鄭仁盛2004）、土器２は楽浪郡設置後のものとみられます（宮本2012）。土器１のように内面に段がある土器は珍しいものです。なお、土器１は2012年に報告しました。

楽浪系滑石混入土器はこれまで原の辻遺跡では石田高原地区で３点、八反地区Ｅ区１号土壙で１点発見されています。原の辻遺跡ではこれまで韓半島系土器が1000点以上出土していますので、滑石混入土器は非常に少ない貴重な事例であるといえます。花盆形土器は煮炊きに使われたと考えられ（谷1986）、楽浪人の日常生活用具でした。出土数は少ないものの、このような資料が出土するということは原の辻遺跡と楽浪郡との結びつきが非常に強かったことを物語ります。

谷豊信1986「楽浪土城址出土の土器（下）-楽浪土城研究その4-」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』5
宮本一夫2012「楽浪土器の成立と拡散-花盆形土器を中心として-」『史淵』149
鄭仁盛2004「楽浪土城의 滑石混入系土器와 그 年代」『百済研究』40



土器2外面

土器2内面

南北市籾（なんぼくしてき）
発行／長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター
〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515-1
TEL：0920-45-4080　FAX：0920-45-4082
URL:http://www.nagasaki-maibun.jp/
第３号
平成25年3月

“錆の塊の正体は？！”

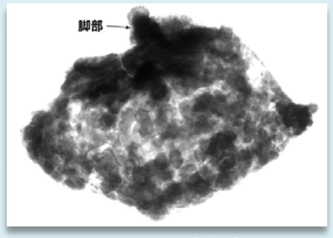
～出土鉄器の保存処理成果～

長崎県埋蔵文化財センターでは、遺跡から出土した金属製品や木製品の保存処理を行っています。金属製品には鉄でできた鉄器や青銅製品、金製品や銀製品、またそれらの複合品があり、その多くは錆びた状態で出土します。特に鉄器は錆や埋土中の砂などに厚く覆われ、元の形状がわからない状態で出土します。

右上の写真は長崎市にある「出島和蘭商館跡」から出土した鉄器です。全体に厚い錆と土で覆われており、半球状鉄製品という以外は正体が分からないままでした。そこで保存処理を行う前にまずレントゲン撮影をし、鉄器の形状や劣化状態を調べました。レントゲン写真からは、この鉄器が亀裂などの形状から鋳造品であり、とても脆いということと、半球状というだけでなく、足のような突起がついていることが判明しました。このレントゲン写真をもとにグラインダーやペンチを用いて錆取り作業をおこなったところ、半球状鉄製品の正体が「鉄鍋」の３分の１程度の破片であることが判明し、錆に覆われて見えなかった鉄鍋の縁や把手、脚部も確認することができるようになりました！元々の形状が判明した鉄鍋は、最後にアクリル樹脂を含浸・コーティングすることで強化しました。

今回の保存処理によって錆の塊から日用生活品が甦ったことは大きな成果だと思います。今後も発掘調査で出土した金属製品はもちろん、収蔵庫に眠る資料からも保存処理を通して新たな発見があるかもしれません！

出土した半球状鉄製品



レントゲン線写真

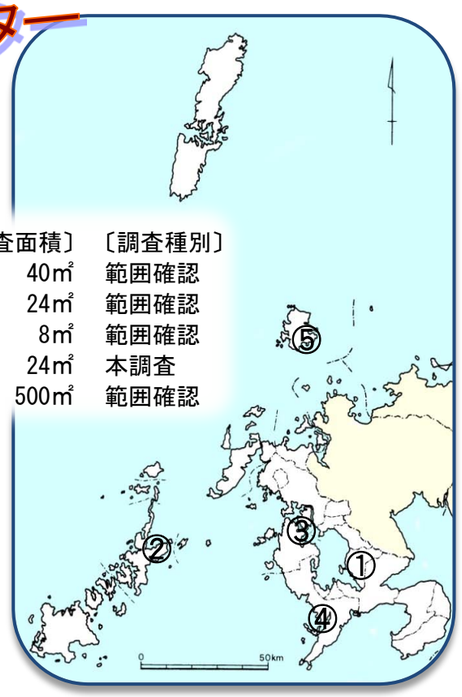
保存処理を終えた『鉄鍋』

透過エックス線撮影装置

グラインダーを用いた錆取り作業

樹脂強化含浸作業

長崎県埋蔵文化財センター 遺跡発掘調査情報



〔遺跡名〕	〔調査期間〕	〔調査面積〕	〔調査種別〕
①小路口遺跡	平成24年7月23日～平成24年8月3日	40㎡	範囲確認
②鯨見山遺跡	平成24年10月1日～平成24年10月3日	24㎡	範囲確認
③伊ノ浦Ｂ遺跡	平成24年10月15日～平成24年10月15日	8㎡	範囲確認
④出島和蘭商館跡	平成24年11月19日～平成24年12月7日	24㎡	本調査
⑤原の辻遺跡	平成24年11月1日～平成25年1月18日	500㎡	範囲確認

小路口遺跡　試掘坑TP10

試掘坑TP10出土の石鏃など

小路口（おろぐち）遺跡（大村市）

大村市にあるJR竹松駅の北東側に展開する扇状地に位置しており、縄文時代から弥生時代の遺物包含地とされています。調査は遺跡の東端部を南北に横切る都市計画道路部分の長さ200m×幅28mの範囲に４㎡の試掘坑を10箇所設定し、それぞれ精査を行いました。調査の結果TP7～TP10の４箇所から、縄文時代、弥生時代、古代、中世の遺物包含層を確認しました。写真はTP10から出土した黒曜石製の石鏃等（縄文時代晩期）です。

鯨見山（くじらみやま）遺跡（新上五島町）

鯨見山とは文字通り、鯨を見張る山のことで、近世初頭から近代まで有川を中心に行われた捕鯨業と関わりのある丘陵です。過去の分布調査で石鏃や黒曜石剝片が表面採取されています。工事計画をもとに20m間隔で４㎡（2m×2m）の調査区を計６か所設けて発掘調査を行いましたが、耕作土の下は玄武岩が風化した自然堆積土層で、遺構や遺物は確認されませんでした。

鯨見山遺跡　調査風景

伊ノ浦B（いのうらびー）遺跡（西海市）

過去の分布調査では縄文時代の遺跡とされています。調査地点は北から南へ緩やかに傾斜する自然地形を「切り盛り工法」で造成し、畑地として利用されていました。４㎡（2m×2m）の調査区を計２か所設けて発掘調査を行いましたが、耕作土の下は岩盤の風化した自然堆積土層で、遺構や遺物は確認されませんでした。

出島和蘭商館跡（でじまおらんだしょうかんあと）（長崎市）

一般国道499号の電線共同溝整備工事に伴う発掘調査で、交通量の多い国道の調査のため夜間に行われました。調査では、出島電停から長崎駅方向の西側道路部分を約20m×4mにかけてアスファルトを取り除き、長さ18m×幅1.2mを掘削し精査しました。調査の結果、元治元年（1864）築足の石垣を検出したほか、第４層以下から近世陶磁器、西洋陶器（写真）、ガラス製品、瓦、煉瓦等が出土しました。

夜間発掘調査風景

出島和蘭商館跡出土の西洋皿

原の辻（はるのつじ）遺跡（壱岐市）

今年度は幡鉾川の北側にあたる川原畑地区の調査を行いました。以前にもこの付近の調査が行われており、弥生時代の土坑・ピット群や河川跡、古代の道路状遺構が発見されていました。今年度の調査では古代の道路状遺構は既に削られてしまい、発見されませんでしたが、弥生時代の土坑・ピット群や河川跡が確認できました。弥生時代の土坑からは多数の土器や石器が出土しましたが、土器には遠賀川以東に分布する型式の土器が比較的多く含まれていたのが特徴です。弥生時代の河川跡からも遺物が発見されました。一般的に河川跡から発見される遺物は小さく磨耗を受けていることが多いのですが、今年度の調査では磨耗されていない大きな土器片や丹塗土器などが集中して出土し、人為的に土器を投棄した後、ほどなくして埋没した状況を確認することができました。

原の辻遺跡　河川跡から出土した丹塗土器

原の辻遺跡　土坑